



四郎

京洛勝負帖
蝦夷館の決戦

柴田鍊三郎



眠狂四郎京洛勝負帖

発行 昭和四十四年三月十五日

定価 三八〇円

著者 柴田錬三郎

発行者 桜井文雄

発行所 広済堂出版

東京都港区芝三ノ二四ノ五

電話 (四五三)〇五五一

振替 東京一四一一四二番

印刷所 桜井広済堂

眠狂四郎京洛勝負帖



蝦夷館の決戦

目次



眠狂四郎京洛勝負帖

5

復讐

77

謀叛

103

鮭
141

狂笑
165

奇人
203

平山行蔵
223

蝦夷館の決戦
249

装
幀
・
挿
絵

中
尾

進

眠狂四郎京洛勝負帖



「失礼でございますが……」

声をかけられて、眠狂四郎は、肱枕の首を擡げて、相宿の男を、視た。

古い小さな旅籠であつた。

京の都といつても、八条から九条にかけて——東寺（秘密伝法院）の五重塔を中心にした一帯には、狭い小路に、うす穢い旅籠や怪しげな貧しい家がひしめいていて、他国者を排斥する気風をつよい都でも、ここだけは、素姓の知れぬ者が多勢入り込む余地があつた。

千本通りに面した、羅城門跡と称ばれているところにあるこの旅籠は、あたりの旅籠にくらべれば、まだ、ましな方であつたが、それでも、三条、四条などのそれとは比べもならなかつた。

狂四郎が、ここをえらんだのは、京洛にも、自分の生命を狙う敵が多いために、身をかかし

た、という次第ではなかった。実は、あるじの、武部仙十郎が、江戸から送り込んだ密偵だったのである。

本丸老中となった水野越前守忠邦は、幕府と禁裏との間に、かぞえきれぬほど積もった確執を解決しなければならぬ面倒な責務も負ったのである。したがって、かなりの頭数の密偵を、京の都に送り込んでいた。

「千本屋」というこの旅籠のあるじも、その一人であった。

客を泊める部屋は、二階に一室、階下に三室しかなく、狂四郎は、泊って二日目に、相宿を承知しなければならなかった。

相宿の客は、駿河まがから来た、という商人で、丹後ちりめんの仕入れをしているということであつた。

朝早く出かけて行き、夜もかなりおそく戻つて来るので、相宿といつても、狂四郎は、五日経っているが、まだ、殆ど口をきいていなかった。

今宵は、珍しく、夕餉ゆづがおわつた時刻に、男は戻つて来て、狂四郎に、声をかけて来たのであつた。

「これは、丹後の地酒でございますが、コクがございまして、旦那のお口にも合うのではない

か、と存じます。いかがでございます」

男は、そう云って、小樽と一合枱をさし出した。

「頂こう」

狂四郎は、やおら起き上って、一合枱を把つた。

唐兵衛と名のる男は、商人にしてはひどく節くれだった手で、小樽を持ちあげると、

「どうぞ——」

と、酌をした。

狂四郎は、この時、はじめて、唐兵衛の顔をまともに視た。

年齒はもう五十路を越えているように思われる。造作はさほどでもないが、自分でつくりあげた貌である。人間ができている貌なのであった。

——ただの商人ではないようだ。

狂四郎は、そう思った。

物腰や口のききかたは、商人以外の何者でもなかったが、こちらと視線が合った瞬間の眸子に、冴えた光が湛えられた。普通、商人というものは、さむらいなどと相對した際、視線が合うと、追従の色をうかべるのを、なかば本能としている。おちつきはらった冴えた光を湛えて、

視かえすことのできるのは、ただの商人ではない証左といえた。

「うまい地酒だな」

狂四郎は、飲み干してから、ほめた。

「持ちかえりました甲斐がございました。なんとなく、貴方様は、お酒好きのような気がいたしましたので……」

「べつに、好きな方ではない。ただ、所在ない生きかたをしているので、なんとなく、飲んでいるに過ぎぬ」

「こういうことをおうかがいして、まことに失礼と存じますが……、貴方様は、これまで、何かにしぼられるような窮屈なおくらしは、一度もなさらなかった——？」

・唐兵衛は、微笑し乍ら、訊ねた。

「そうみえるか」

「はう」

「主取りをしたこともなければ、金でやとわれたおぼえもないゆえ、当人は、気ままに生きて来たつもりだが……、深山で炭を焼いて生涯をすごしているような人間から比べれば、世俗の中でその日その日をすごしているのだ。殺したくもない人を斬ったり、心の美しい女を不幸な

目に遭わせて悔いたり——おのれの意志とはうらはらな愚かな行為をくりかえしているよう
だ」

「勝手なことを云わせて頂けるなら、そのようなくらしをなされたおん身の深い傷痕が、てま
えどものような者には、さぞおつらいのではなからうか、と思われるのでございます」

「無駄な同情だな。他人に憐みをかけられるほど、孤独というものに堪えているわけではない。
寝そべっている時は、痴呆でいられるのだ」

狂四郎は、薄く笑って、こたえた。

すると、唐兵衛は、ひとつ歎息して、

「修業をなされたことだ。てまえなどは、この年になり乍ら、時折、無性にさびしくなって、
神様におすがりしたくなるのでございます」

「……」

「たった一人、ということとは、辛いものでございます」

「駿府に家を持たぬのか？」

「あるにはあるのですが、智能の足らぬ妹が一人、近所となりには嘸われ乍ら、留守を
まもって居ります」

「……」

「十年前に、女房と子供二人が、てまえの留守中、疫病で亡くなって、死んでもよい白痴の妹が生きのこったのでございます。浮世は、ままならぬものがございます」

唐兵衛が、そう云って、かぶりを振った時、あるじが入って来て、

「お使いが、参りました」

と、一通の封書を、狂四郎に手渡した。

披いてみると、それは、京都町奉行からの招待状であった。

二

京都町奉行・寺沢内膳正は、去年、所司代の懇望によって、大阪町奉行から転じて来た人物で、利け者という噂であった。

京都の支配者は、所司代であり、禁中の守護、皇室、公卿、門跡などに関する幕府の事務を行い、さらに、五畿内、丹波、播磨、近江八箇国の幕府直轄地の統治、西国三十三箇国諸侯の監督、など広い権限を与えられている要職であったが、実際には、名目をたてるだけで、さしたる政治力を必要とせず、実際の事務は、京都町奉行にまかせていた。

したがって、京都町奉行が、事実上の権力者といえた。

所司代の方は、江戸に在ることの方が多かったのである。

町奉行は、禁裏御所の警固を第一目的として相勤める、ということになっているが、実際は、御所方賄い、物入りの増減の調査、公卿方の動静の監視など、目付の役目をつとめた。さらに、五畿内の寺社朱印を指揮し、諸宮門跡といえども、その下知に従わせた。所司代に代って、西国諸侯に対する探題の任務をはたすこともあり、また、山城、大和、近江、丹波四箇国は、その支配下にあつたので、公卿領であろうと大名領であろうと、容赦なく、取締りの権力をふるつた。

摂家、官方、清華、その他堂上公卿の行跡は、すべて、町奉行の監視の中に置かれるのであつた。

その勢威は、他の遠国奉行の比ではなく、大臣と雖も、遠慮したものであつた。

眠狂四郎が、書院に坐ると、寺沢内膳正は、待たせずに、姿をあらわした。

瘦せこけて、顔色のわるい、鷺鼻の、ひどくおちつきのない人物であつた。

「お主、上洛の途次、薩摩の手練者どもを、片はしから、斬つたそうだの」

口調も、せかせかしていた。

狂四郎は、こういう型の人物を、好まなかった。

「お呼びの趣、うけたまわりたい」

狂四郎は、対手が京都町奉行であろうが、べつに、頭もひくめずに、視かえした。

「名は申せぬ。ただ、高貴のお方とだけ申しておく。……昨夜、行方知れずに相成った。いや、さらわれた、と断定した方がよいかも知れぬ」

「……」

「高貴のお方であるし、また他にも、仔細あつて、奉行所で人数をくり出して、公然と探索するわけに参らぬ。お主に、この役目、たのみたい」

「これは、公儀隠密衆の任務かと存ずる」

「お主が、ことわることは、予想して居った。しかし、ことわられては、困る。お主でなければ、やれぬ役目だ」

「……」

「お主が、なんとなく、高貴な身分らしい姫君だ、と思つて、素姓も知らずに、救い出してくれた。そういうことに、いたしたい」

「姫君？」

「左様——。美しいお方だ。どんな場所に置いて、一目で、これは、高貴の身分のお方だ、と判る。どうだ、お主の役目であろうか」

寺沢内膳正は、にやりとしてみせた。

「他の者に、お申しつけ頂きたい」

狂四郎は、冷やかに、拒絶した。

「ま——そう、にべもなく、かぶりを振ってくれるな。これは、ただのかどわかしてはないのだ。一月あまり前から、禁裏の台所が、急に、ゆたかになった。上皇がおすまいの仙洞御所の方も、にわかには、修理やら能楽やら、高野山へご参詣やら、おくらしづりが派手に相成った。わしが、その金子の出どころを、おうかがいいたしたところ、宝物を、大阪商人どもへ下げ渡した、という。調べたが、そのような事実は、ない。どうも、解せぬ、と思っていたところ、姫宮の突然の失踪だ。……わしの推測するところ、大阪商人が、これには、一役買って居る。となると、公儀隠密では、歯がたため。對手が、大名ならば、公儀隠密も、働くすべを心得て居るが、大阪商人では、しまつがわるい。なにせ、鼠のように要心ぶかく、牛のように辛抱よく、貝のように口がかたく、狡猾さに於ては狐狸以上の手輩だ。第一、うなるほど、金を持って居る。わしは、大阪町奉行を、十年勤めた。大阪商人どものしぶとさ、ずるさ、頭のよさ